

～潮流を読む～

問題のない大会の方が少ないオリンピック ～東京大会が示すべき新しい形式～

亜細亜大学 都市創造学部
教授
後藤 康浩



「東京オリンピック・パラリンピック 2020」開催が国論を二分している。世論の動向は調査によってばらつきがあるが、開催と中止がほぼ拮抗、各界からの発言ではやや中止論が多い印象だ。反対論は概ね「コロナ感染という深刻な問題の時にスポーツの祭典はないだろう」という点に集約できる。

では、オリンピック（夏季）は問題のない時に開催されてきたのか？振り返ればまったく逆だ。欧州に暗雲が広がっていた1936年のベルリン五輪は言うまでもなくナチスドイツの大宣伝の舞台となり、ヒトラーの独壇場だった。その勢いのままに欧州は第二次世界大戦に突入した。1940年の東京大会は中止されたが、開催されていればベルリンと同じになっただろう。

戦後、1968年のメキシコ大会は開催10日前に民主化を求めるデモを軍が弾圧、数百人の死傷者が出るという緊張状態の中で開催された。1972年ミュンヘン大会は中東問題を背景にパレスチナゲリラによるイスラエル選手11名の殺害という悲劇が起きた。1976年のモントリオール五輪は南アフリカのアパルトヘイト（人種隔離政策）への批判でアフリカ22カ国がボイコット。1980年のモスクワ大会は前年のソ連（当時）のアフガニスタン侵攻で、西側諸国がボイコットする大会となった。1984年のロサンゼルス大会はその報復でソ連、東欧諸国がボイコットした。

1964年の東京、1988年のソウル、2008年の北京のアジアの3大会は開催国の発展と安定を世界に示す「平和の祭典」となったが、むしろ例外的とっていい。オリンピックは問題を抱える世界が絆と突破口を見つける場というのが真実なのではないか。とすれば、コロナ感染に世界が覆われ、世界経済が停滞のなかにある今、「突破口としての東京五輪」はあり得るのではないか。

無観客であっても、参加選手が限定されたとしてもオリンピックが開催されれば、世界各地で人々の目はテレビやネットの中のアスリートに向けられる。世界の目がコロナ以外の

ものに共通して向けられ、他国の選手のことを知り、拍手を送ることだけでも十分な開催の意味があるだろう。

オリンピックがコロナを拡散させるリスクはあるだろうが、東京がそのリスクを抑え込み、経済リバウンドのモデルになれば世界への力強いメッセージになるはずだ。女優の岸恵子さんが最近の著書で紹介された「卵を割らなければオムレツはつukれない」の言葉を借りれば、「オリンピックは開催しなければ、世界を変えられない」のである。